縮小社会研究会　第 59 回研究会

日時：2021 年 12 月 3 日、19：00-20：30
オンライン(zoom)
https://us02web.zoom.us/j/83224389660?pwd=UjZqYjNoOXpDMWRSTzRxc3VlTHhzdz09
パスコード: 625288,　　ミーティング ID: 832 2438 9660

海洋プラごみ問題のモヤモヤ

講師：保坂 直紀　博士(学術)

講演要旨：　わたしたちの生活を支えているプラスチックがごみとなって海に流れ込み、広く地球の環境を汚していることは、すでに社会に知られるようになった。いまは市民がアクションを起こす段階だ。

だが、みんなが一人の市民としてプラスチックごみの削減に取り組もうとするとき、いろいろなモヤモヤ感に出合う。「わたしは何か見当違いのことをしていないだろうか」「自分ひとりの努力が実を結ぶのだろうか」「まったく関心を持たない人もいるし…」。地球温暖化問題にともなうモヤモヤ感とよく似ている。

このモヤモヤ感とどう闘うか。まず大切なのは、市民の一人ひとりに、このプラスチックごみ問題のファクトをきちんと伝えることだ。では、誰が伝えるか。もちろん専門家でもよいし、それに加えて、専門家の知を受け止められる「対話型暗黙知」をもつ準専門家だという指摘がある。

いまの日本では、科学の知が社会の意思決定にうまく生かされていないようにみえる。専門的な事柄を社会に伝えるとき、「リスクコミュニケーション」の考え方が参考になる。これは危機情報の伝え方ではない。その事柄に関し日常から社会の関心を高め、市民の「聞く耳」を育てておくことがリスクコミュニケーションの本質だ。

プラスチックごみ問題のファクトを市民が共有し、一人ひとりの力が将来を変えると信じる社会を目指すことで、このモヤモヤ感を乗り越えたい。

保坂 直紀さんの略歴：　サイエンスライター。東京大学大学院新領域創成科学研究科/大気海洋研究所特任教授。東京大学理学部地球物理学科卒業。同大大学院で海洋物理学を専攻。博士課程を中退し、1985 年に読売新聞社入社。科学報道の研究により、2010 年に東京工業大学で博士(学術)を取得。2013 年に読売新聞社を早期退職し、2017 年まで東京大学海洋アライアンス上席主幹研究員。2019 年から現職。気象予報士。著書に『謎解き・海洋と大気の物理』『謎解き・津波と波浪の物理』『びっくり！地球４６億年史』(講談社)、『クジラのおなかからプラスチック』(旬報社)、『海洋プラスチック～永遠のごみの行方～』(KADOKAWA) など

参加登録：松久(h.matsuhisa@shukusho.org)まで連絡願います。非会員の方は、松久まで氏名と所属などをお知らせ願います。参加費は無料です。

一般社団法人 縮小社会研究会　e-mail: jimukyoku@shukusho.org　HP: http://shukusho.org/